Ｉｎｔｉ's Ｓｔｏｒｙ―Ｎｉｎａ

みんみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｉｎｔｉ'ｓ　Ｓｔｏｒｙ―Ｎｉｎａ

【Ｎコード】

Ｎ５２５８Ａ

【作者名】

みんみん

【あらすじ】

遠い昔、海に浮かぶ大陸が沈んだ時に人々は世界中に散り散りになった…ただその記憶に昇る太陽を刻みつけて。そして人々は再び太陽の息子である王の元、新しい国を創造する。その国の名はタワンティンスーユ。しかし、いまやこの国も滅亡の危機にさらされていた。そんなこの国に生まれた宿命を背負った少年たち。その少年たちが紡ぐ過去・現在・未来の太陽―インティの物語。

序章

そこは世界の中心と呼ばれた都市の地下深く―。地上のきらびやかな喧騒とは無関係な世界。自然のものかそれとも人の手によるものかむき出しのままの岩の壁に小さな窪みがいくつかありそこにわずかな灯が申し訳程度に辺りを照らしていた。目を凝らして見ると…その灯の中でも高い天井が見えて、そこにはかなり広い空間があることがわかる。―そして。

その片隅に何者かがうずくまっている。人か獣か。じっとまるで岩の一部になってしまったかのように。

その時。ふいに空気が動いた。壁の灯がゆらりと揺れた。姿を現わしたのは一人の男。年齢は２０代くらい…頭に羽根飾り、黄金の装身具を身に着けた彼はあたりを見回した。…どこから入って来たのか―出入り口は見当たらない。男はやがて先ほどのうずくまる者を見つけて歩み寄った。男が側まで行くとその者は顔を上げた。長く伸び放題の髪、髭、そしてらんらんと輝き男を見据える瞳。―多分、二人の年齢はそう変わらないと思われる―。

「…あ…。」

男がかすれた声を出した。

「…兄上…私です…おわかりになりますか？」

兄と呼ばれた男は反応しない。まるで見知らぬ相手を警戒する獣のようにじっと相手を睨み付けている。

「…兄上…ワスカルです。」

そう言って男が兄の体に触れようとした瞬間だった。

「…！」

急に兄の方が立上がりつかみかかろうとしたのだ。咄嗟に男は身をかわしたが鮮やかな色の衣をつかまれその衣が大きく裂ける。

「兄上っ！」

男は声をあげた。兄はまるで獲物を逃した獣がじたんだを踏むよう

に暴れまた襲いかかろうとする。だがそれは手足につけられた黄金の枷と鎖が阻んでいた。
「…兄上…それは…。」
ワスカルが小さくつぶやく。誰が兄を繋いだのか彼の目には明白だった。
「…兄上！」
兄の方は返事の代わりに叫び声をあげた。それは人としての言葉では到底ありえなかった。
「…どうして…兄上…。」
ワスカルはつぶやいた。
「…どうしてこんなことに…兄上…兄上…。」
言いながらワスカルは頭を抱えて座り込んだ。
「…どうしてこんなことをなさるのですか、父上―！」
―その叫びに答える者は―ない。

第一章　夜明け前

何度も何度も同じ夢を見た。今はもう会えない、永遠に会うことのかなわない愛する人の夢。
―あなた…
手を伸ばす。差し延べられた手に触れる。
―きっと…またいつか、きっと。
あてのない約束。温かい手を握ると握り返してくれる。
―…きっと。

そこで彼女はハッと目を覚ました。起き上がって家の入口を見る。
「誰？！」
人の姿はない。ただ確かに誰かがいた気配が漂っている。
「…まさか。」夢の中で感じた温もりを手の中で握り返す。
「…ん…」
傍らで小さな声がした。彼女は振り向く。
「…どうしたの…母様…。」
眠そうに小さな男の子が毛布の中から言う。彼女は微笑んで母の顔になった。
「何でもないのよ…夢を見ただけ…」
そう言って男の子の頭をなぜた。
「…そう。」
男の子は言って大きくあくびをした。
「さ、もう一度眠りましょう。まだ夜明けには早いわ。」
「…うん。」
小さくうなづいて男の子はまた目を閉じた。それを見て彼女はもう一度微笑んだ。
「…おやすみ、ニナ。いい子ね。」
その母の声が聞こえたかどうか…ニナと呼ばれた少年はすぐに寝息

を立て始めた。

その少年の名はニナと言った。まだ彼は何も知らず—知らされてもいなかった。彼がいずれこの国を揺るがす争いに巻き込まれて行くことも、今は彼には預り知らぬことであった。彼はまだあまりにも幼く彼の世界は母と自分とわずかばかりの人々でほとんどを占めていたのだった。

—しかし。

変化とは時に突然訪れるものである。それが例え必須の運命だとしても。それはニナの場合も例外ではなかった。

第二章　訪問者

宙に向かって小さな手が小石を投げる。
小石は宙を舞ったあと青い湖面に落ち波紋を作る。何度かそれを繰り返したあとニナがまた小石を投げると小石はまるで生き物のように空中で円を描いて水面に落ち、さらに水面でくるくる回るとまるで水飛沫が花のように見えた。それを見てニナは満足そうに笑う。
それはいつの間にか覚えたニナの一人遊びだった。誰に教えられたわけでなく―ニナは自分の能力を使って遊ぶことをできるようになっていたのだ。
目の前にはるかに広がる湖はティティカカ―彼らの一族の先祖が降り立った伝説を持つ地だ。岸から遠く離れた湖面に葦舟が何そうか浮いているのが見えた。彼の目にはその船に乗っているのが誰で何をしているのかハッキリ見えていた。再び、思い出したように彼は小石を投げた。今度は空中でくるくると回って静止してからそのまま湖面に音をたててまっすぐに落ちた。
「こんにちは。」不意に声を掛けられてニナは驚いて振り向いた。
そこには一人の女性が立っていた。
「あら、驚かせてしまった？ごめんなさいね、あなたがあまり楽しそうだから。」
ニナはじっと彼女を見つめた。おそらくは母といくつも変わらないだろう。母よりは若いことはニナにもわかった。色鮮やかな衣に黄金の首飾り。身分の高い女性であろうことは彼女の背後に控えている召使らしい二人の女性からもわかった。
「…あなたは誰？」
ニナが言った。女性が微笑む。美しいな、と子供心にも思った。多分彼女を嫌う人間などありえないとすら思える、人を和ませる温かい笑顔だった。不思議なのはその瞳だった。吸い込まれるような瞳―少し翠がかった。「私は、コリ・ティカよ、あなたはニナね。」

ニナは小さくうなづいた。コリ・ティカは手を伸ばしてニナの頭に手をおいた。そしてニナの前にかがんで視線を合わせた。「…何歳？」
「…4歳。」
ニナが答えた。コリ・ティカの目が少し悲しげに曇る。
「そう。じゃああれからもう5年近くたつのね。」
そう言ったコリ・ティカの瞳が自分を通り越して誰かを見ていることに気付いて口を開く。
「何を見ているの？」
驚いた顔でコリ・ティカがニナを見る。
「あなた…“わかる”のね。」
「……」
ニナは黙ったまま上目遣いにコリ・ティカを見る。コリ・ティカは頭をもう一度なぜた。
「…あなたのお母様にお会いしたいのだけど。」
「…どこにいるかわかる？」
「うん。」
ニナは小さくうなづいた。ニナが口を開こうとするとコリ・ティカが止めた。
「ごめんなさい、私は“翔べ”ないから歩いて行きましょう。いい？」
ニナはコリ・ティカを見た。なぜこの人は自分がやろうとしていることまでわかるのだろう？コリ・ティカが笑顔で手を出す。その手を握り、ニナも一緒に歩き出した。

第三章　コリ・ティカ

家はティティカカ湖に近い村の外れにあった。
村人たちの噂では母はこの辺の生まれではなくどこかもっと北の方の部族の出身で―一部の村人たちは王―インカ―の血を引く貴族の出ではないかという噂すらあった。確かに母は美しかった。ただそれだけではなくてもっと違うもの―髪は夜の闇のように黒く艶やかで同じ色の瞳は穏やかながらも何か芯のある意思の強さを見せて、控え目な中にある気高さがそんな印象を人によっては与えていたのだろう。ニナは手をつなぐコリ・ティカを見上げた。コリ・ティカも同じような印象を受けたが母と決定的に違うところは彼女はその内側から輝くばかりの、その外見ばかりでなく美しさと気高さ、誇り高さを漂わせていた。その名のとおり、
「黄金の花―コリ・ティカ―」
のように。家の入口の前に立つとニナはまたコリ・ティカを見た。
「ここ？」
「うん。」
「中にいるみたいね。」
コリ・ティカが言ったところで母が家の中から顔を出した。ニナは母がすごく驚くのではないかと思い母の顔を見た。しかし母は驚いてはいなかった。
「…皇女様。」
そう口の中でつぶやいて母はひざまづくとコリ・ティカに向かって深々と頭を下げた。
「お久し振りね、タラナ。」
コリ・ティカが少し悲しそうに微笑んだ。
「顔を上げて。」
母―タラナは首を振る。「大丈夫よ…この者たちは…私の側近中の接近…お父様の命を受けているから。」

コリ・ティカは自分の召使たちを手を広げて差した。それでもタラナは顔を上げない。
「タラナ。」
促されてようやくタラナは顔を上げた。
「母様！」
ニナが不安になってタラナに抱き付いた。タラナはニナを抱き寄せたがその顔は今までニナが見たこともないくらい真剣な青ざめた顔をしていた。
「…よく似てるわ。」
コリ・ティカがつぶやくように言った。タラナは目を伏せてニナを抱きしめた。
「私が来たのはなぜかわかっているわね、タラナ。」
「…はい。」
タラナは小さく答えた。「…お父様の代わりに来たのよ、私は。あなたにお父様からの伝言を伝えたいのだけど…中に入ってもいいかしら？」
「…どうぞ…こんなところですが。」
タラナの声はようやく聞き取れるくらいの小さい声だった。中に入ろうとしたコリ・ティカがニナを見る。
「…ねえ、ニナ。お願いがあるんだけど。」
ニナは警戒した瞳でコリ・ティカを見る。
「お母様と二人でお話したいのだけど、いい？」
「嫌。」
ニナは首を振る。
「ニナ！」
タラナがたしなめる。コリ・ティカが笑う。
「あら、困ったわね。だめ？」
「うん。」
「じゃあ違うお願いをしようかしらね。私たちはクスコと言うところから来たのだけど明日には帰らなくてはいけないの。だからね、

お土産にこの辺でしか咲いていないお花が欲しいの。…あるかしら？」
コリ・ティカが言うとニナがうなづく。
「咲いているところもわかる？」
「うん。」
「じゃあお願い。取って来てくれる？」
ニナは返事をせず母を見た。タラナもニナを見る。
「大丈夫よ。行って来なさい。」
タラナは言った。
「母様もこのお方とお話があるから。」
「……。」
ニナはようやく母から離れる。
「あなたたちも行ってあげて。」
コリ・ティカが女官たちに声をかけた。コリ・ティカがニナを見る。
「ありがとう。少しお母様を借りるわね。」
「うん。」
ニナはうなづくと歩き出した。女官たちが慌てて後を追う。その後ろ姿を見送ってから二人は中に入った。

第四章　決意

「どうぞ。」
タラナは床に毛で織った布を敷いた。コリ・ティカがその上に座る。
「今、チチャをお持ちします…」
「何もいらないわ、タラナ。ここに座って。」
コリ・ティカが言うとタラナは向かい合って座り今度は床に手をついて深々と頭を下げた。
「タラナ。」
たしなめるようにコリ・ティカが言う。
「お願いだから顔を上げて。」
コリ・ティカはタラナの手を取り顔を上げさせた。
「…そんなに自分を責めないで。あなた一人のせいじゃないをだから。」
そう言ってコリ・ティカは笑った。
「…あの子…いい子ね。賢くて…いい子だわ。」
「皇女様…。」
「…お兄様の…小さい頃にそっくり。」
「……。」
タラナはうつむいた。その瞳から涙が落ちる。コリ・ティカが首を振る。
「…タラナ…泣かないで…私はうれしいのよ。あの子があんなにいい子に育ってくれたことが。あんなにいい子に育て手くれて—ありがとう、タラナ。」
タラナは首を振って涙を拭いた。
「…ありがたいお言葉…もったいのうございます。」
「4歳だって言っていたわね。」
「はい。この八月には5歳になります。」
「…タラナ、あの子はきちんと教育を受けさせてあげなきゃいけな

いわ。」
コリ・ティカの言葉にタラナは顔を上げた。
「皇女様…。」
「…ニナと一緒にクスコに来ない？」
「……！」
タラナは大きく目を見開いた。コリ・ティカがうなづく。
「お父様のお許しが出たのよ。」
「…皇帝陛下の。」
「そう。」
タラナは両手を胸の前で合わせて握り締めた。
「考えてみれば当然のことなのよ。だってあの子はお兄様の―このタワンティンスーユの皇子の子なのだし。」
コリ・ティカが言う。
「こんなところでずっと育つべき子じゃないわ。わかるわね、タラナ。」
「はい。」
タラナは小さくうなづく。
「いつかは…あの子を皇帝陛下のもとへお返ししなければ…とは思っていました。」
「…そう。」
コリ・ティカは微笑んだ。
「…ニナのケチュア語。とてもきれいね。あなたが教えたのでしょう？あれならいつクスコに行っても恥ずかしくないわね。」
「……。」
「…あの子は本当に賢い。自分の力もわかっているようだし。クスコできちんと教育を受ければきっとタワンティンスーユでも誰にも負けない立派な人間になるわ。」
「…でも皇女様。」
タラナは言った。
「…クスコの方々はあの子を許して下さっているのですか？」

「……。」
コリ・ティカが少し悲しそうに微笑んだ。
「クスコに…あの子が生きて行ける場所があるのですか？」
タラナの声は消え入りそうだった。
「…タラナ…。」
「わたし…わたしはいいんです。誰に何と言われようと罵られようと。ただ、ニナ…あの子だけは…あの子には罪はない…あの子は何も知らないんです…父親のことも…私とあの方の罪のことも…。」
「タラナ。」
コリ・ティカがタラナの肩に手を置く。
「わかっています。命を長らえただけでも幸運…皇帝陛下の御慈悲なのだということは…でも…やはり。私も母親です。あの子の将来に思いを馳せないと言えば嘘になります。
まして…あの子はあの方の御子…王ーインカーの血を引く身。きちんと育てなくては…太陽神ーインティーに申し訳ない…。」
「…わかっているわ、タラナ。私も—お父様も思いは同じよ。」
コリ・ティカが言う。
「あの子は、あなたの中にある王ーインカーの血も引いている…大切にしなくては、私たちも太陽神ーインティーに申し訳できないわ。」
「……。」
「2年、待ってもらえるかしら？」
コリ・ティカの言葉にタラナはコリ・ティカを見た。
「あの子が6歳になるまで。」
「皇女様、それは…。」「クスコの人々はもうお兄様のことは忘れかけている。王族でない貴族たちもそう。だから…クスコに来るのなら一番心配なのはニナ、あの子自身の記憶。」
「—あの子の記憶。」
「…そう。私たち一族が誰もが持っている“血ーヤワルー”の中の記憶。それが万が一にも甦るようなことがあれば—。」

「でも…簡単には甦るものでは…」
タラナの声が震えた。
「そうね。」
コリ・ティカはうなづいた。
「普通は無理ね…あり得ないことだわ。でも少し力のある預言者なら…甦らせることは可能だわね。難しいことではないはずよ。」
「……」
タラナは首を振った。
「…だから…私とお父様と叔父様と…それに賢者ーアマウターの長、ワウレと相談して決めたの。」
コリ・ティカが言った。
「…あの子の中の“記憶”ーユヤイーを封印します。」
「皇女様…。」
「…“記憶”に関してはワウレが専門家よ。うまくやってくれるわ。」
「……」
「…でもね、今すぐはできないの。ワウレが言うにはあの子はまだ幼すぎるって。」
「では…。」
「…まだ精神が柔らかすぎるから思いも依らぬ傷をつけてしまうかもしれないからって。せめて6歳まで待った方がいいだろうって。」
コリ・ティカはそこまで言うと静かにタラナを見つめた。
「どうかしら、タラナ。」
今度はタラナの反応を待つ。どのくらい時間がたったか—ようやくタラナは口を開いた。「他に…道はないのですね。」
「ええ。」
タラナはまた黙った。しばらくしてからタラナはかすれた声を出した。
「…わかりました。」
「タラナ。」

「それがあの子のためならば。」
小さいけれどもきっぱりと決意を表す声だった。
「ありがとう、タラナ。」
コリ・ティカは微笑んだ。
「…大丈夫、きっとうまくいくわ。」
タラナはまたうつむいて涙を拭った。コリ・ティカがその頬に手を伸ばして顔を上げさせた。
「いつも思うのよ。」
コリ・ティカが言う。
「私たちは―どうしてここにいるのかしらって。どうして今なのかしらって。」
「…皇女様。」
「もし、こんな時でなければ―もしも、兄様が統治者だったら…もしも、って。」
「……。」「…今のこの国は沈みかけた船よ。…でもなんとかしなくてはいけない。」
コリ・ティカの瞳が遠くが見る。
「…こんな時代でなければあなたはきっと堂々と兄様の妃になれたわね。」
「…いいえ。きっとあなたがあの方の正妃ーコヤーになられたはずです。」
コリ・ティカは悲しそうにタラナを見た。
「そして、きっとあの子ももっと違う生き方ができたはず―。」
「タラナ。」
コリ・ティカは言った。
「…もうやめましょう。言ってもしかたないことだったわ。ごめんなさいね。」「皇女様。」
「ニナたちが戻って来たみたい。話はここまでにしましょう。…クスコで待っているわ、私も。…あ、でも。」
コリ・ティカは言った。

「…私ね、アタワルパ兄様の妃になるの。キトーへ行くの。」
「……！」
タラナがコリ・ティカを見る。コリ・ティカは微笑んだ。
「これからのことは、コアティ島の神殿にいる姉様が助けて下さるわ。何かあれば神殿を訪ねてちょうだい。」
「はい。」
タラナはうなづいた。
「来たわね。」
コリ・ティカは言って立ち上がった。

両手にたくさんの黄色い花を抱えてニナが歩いて来る。
「まあきれい…。」
コリ・ティカが声をあげた。
「こんなにたくさん…ありがとう、ニナ。」
ニナが花を差し出すとコリ・ティカが嬉しそうに受け取った。
「これでクスコに帰れるわ、ありがとう。」
ニナは少し恥ずかしそうにもじもじした。コリ・ティカがニナをのぞきこむように見た。
「…クスコで待っているわ。」
コリ・ティカが囁く。キョトンとしてニナが見返す。
「待っているわ…ニナ。」

第五章　兄妹

やがて―コリ・ティカは二人の女官を連れて帰って行った。タラナと手をつないでニナはそれを見送った。三人の姿が見えなくなると―タラナはギュッとニナの手を握り締めた。「母様？」
ニナが見上げた。タラナはただ黙ってコリ・ティカの姿の消えた方をじっと見つめていた。

「…コリ・ティカ。」
呼び止められてコリ・ティカは振り向いた。
「ワスカル兄様。」そこにはワスカルが立っていた。
「父上に会って来たのか。」
「ええ。」
コリ・ティカがうなづくとワスカルは不機嫌そうに言った。
「ティティカカに行って来たのだな。…タラナに会ったのか。」
「ええ。…その子供にもね。」
「今更。」ワスカルは吐き捨てるようにに言う。
「でも…兄様の子よ。」
コリ・ティカが言う。
「…あのままにはしておけないわ。」
「…そなたは。」
ワスカルはイライラしたように言う。
「父上や叔父上が兄上にした仕打ちを忘れたのか？」
「…忘れてなどいないわ。」
コリ・ティカが静かに言う。
「今まで、ずっとね。」
「ならば尚更だ。今更兄上の子やタラナに会いに行ってどうするつもりだ。このクスコにあの二人を迎えることができるはずもあるまい。」

「…どうして？」
「コリ・ティカ！」
半ば呆れたようにワスカルは驚いた顔をする。
「王族の者はまだ忘れてなどいない。みな、忘れたふりをしているだけだ。」
「そうね。」
「…例え、クスコに戻れたとしても…受け入れられるはずがない。」
「兄様。」
「…二人そろって殺されるかもしれぬ。今度こそ。」
「兄様！」
コリ・ティカがたしなめた。ワスカルも多少バツが悪そうに黙った。
「…そんなことにはならなくてよ。」
溜め息をついてコリ・ティカが言う。「そんなことはさせないわ、私とお父様が。」
「…でも。」
ワスカルは言った。
「そなたは行くのだろう、キトーへ。」
「お兄様。」
コリ・ティカは言って真っ直ぐにワスカルを見た。
「…今はもう、お父様の嫡男はお兄様しかいない。このクスコを守れるのは…お兄様しかいないのよ。…クスコは、いいわ。結界に守られているし…王族もたくさんいる。…でもキトーは違う。」「……。」
「アタワルパ兄様にはキトーを守ってもらわなくてはいけないの。だから、私がついていなくてはいけないのよ。」
「なぜ、そなただ。」
ワスカルが言う。
「…皇女は…そなたの他にもたくさんいるのに！」
「……。」
コリ・ティカは黙って目を伏せる。

「兄上…兄上さえおられれば…。」
ワスカルが悔しそうに言った。コリ・ティカは首を振った。
「…今更、だわ。お兄様。」
「……。」
「…2年。」
コリ・ティカが言う。
「2年後よ、兄様。タラナとその子がクスコに来るのは。…すべてはそれからよ。」
「コリ・ティカ。」
ワスカルは言った。
「くれぐれも言っておくが―父上や叔父上…それにワウレが大切なのは兄上の子供ではなく王―インカ―の血を引く子供なのだと言うことを忘れてはならぬ。」
「それならばなおさら、ニナは殺されたりしないわ。」
コリ・ティカはそれだけ言うと歩き出した。ワスカルはその背を黙って見つめ唇を噛んだ。
そして、時はゆるやかにだが着実に流れて行く。花が実を結びそして雪が降りその雪が溶けて木々に新しい命が芽吹き―そんなことを2回繰り返してニナは6歳になった。

第六章　賢者

静かな湖面を一艘の舟が静かに走って行く。やがて舟が湖の中にある島に着くと舟から一人の少年が飛び降りた。
「お母様、先に行ってるね！」
言うが早くニナは走り出した。
「ニナ！転ばないようにね！」
「はーい！」
タラナの言葉に大きく返事をしてニナは一目散に走り出した。タラナはニナの後ろ姿に苦笑して舟から降りた。
「ありがとう。」
舟を漕いでいた男に声をかけるとタラナも歩き出した。この湖に浮く島には神殿があり、その昔この地に降り立ったという祖先を祭っていた。
「……。」
立ち止まってタラナは向こうの建物を見た。石造りの大きな建物が見える。この2年間、タラナは時々この神殿をニナを伴って訪れていた。
「お母様～早く～！」
遠くからニナの声がする。タラナは思い切ったように足を早めた。神殿の神に祈ったあと、二人が外に出るとそこには二人のことを待っている人物がいた。一人はこの神殿の主であり、現皇帝ワイナ・カパックの長女オクロ。そしてもう一人は―。
「…お久し振りね、タラナ。」
オクロが笑う。―コリ・ティカの異母姉にあたるわけだが彼女とコリ・ティカに全くと言っていいくらい似ているところはなかった。ただ笑顔の温かい優しい女性だった。
「…お久し振りでございます。」
タラナが礼をした。

「……ニナも。また背が伸びたかしら？」
オクロはにこにこして言う。ニナは大きくうなづいた。
「…村では同じ年の子だと僕が一番大きいよ。」
「そう。」
「…ぼくは早く大きくなりたいんだ！」
「あら。」
オクロがニナをのぞきこむ。
「どうして？」「早く大きくなってお母様をクスコに連れて行ってあげる。」
一瞬―オクロの表情が変わる。ニナの後でタラナの顔も強張った。
「…そう。ニナはクスコに行きたいの？」
オクロが優しく聞く。ニナはうなづいた。
「だって…あの人が待ってるって。」
「コリ・ティカのことね。」
オクロは言った。
「…そうね…待っているわね。それより今日はあなたに会いたいっていう方がいるのよ。」
ニナが視線をオクロの背後に向ける。そこには一人の男が立っていた。
「こんにちは。」
男は微笑んだ。見るからに身なりのいい―年はタラナよりはいくつか上のようだった―男で首に銀製の首飾りをしているのが見えた。
「…おじさん…賢者ーアマウターなの？」
ニナが首を傾げる。男はうなづいた。
「…ほう。この首飾りの意味がおわかりか。」
男が言う。
「…うん。お母様が教えてくれた。」
「そうですか。私は賢者ーアマウターの長にして予言者、ワウレと申します、ニナ。」
「…ワウレ殿はクスコからいらしたのよ。」

オクロが言う。ワウレはニナに近付くとかがんだ。
「6歳におなりでしたな。」
「…うん。」
「…キーヤと同じ年か…いくらも誕生日もかわらないはず…確かにキーヤより大きい。」
「…月ーキーヤー？」
ニナが聞く。ワウレは笑った。
「これは失礼。…月ではなくて私の息子の名です。あなたと同じ年で…きっとあなたと良い友達になれるでしょう。」
「ワウレ様…」
タラナが言う。ワウレがタラナを見上げた。
「お久し振りです、タラナ姫。…6年…いや7年ぶりですか。」
タラナは小さくうなづいた。
「今日は私は皇帝陛下の命でやってまいりました。」
ワウレが言う。
「お迎えにあがったのです、あなた方を。」
「まあ…」
オクロが声を上げて涙ぐむ。
「じゃあ…クスコへ？」
「ええ。準備が整いましたゆえ。」
「そう…よかったわね、タラナ。きっと、父上もお喜びになるわ。」
「はい。」
タラナが伏目がちにうなづいた。
「…そちらの準備もおありでしょうから。」
ワウレが言った。
「出発は明後日にいたしましょう。明後日、お迎えにあがります。」
「ニナ。」
オクロが言う。
「よかったわね、本当に。クスコに行ってもお母様と仲良くね。守ってさしあげてね。」

「はい！」
ニナが大きくうなづいた。
「…そうだわ、ニナ。ワウレ殿がクスコから珍しい果物を持って来て下さったのよ。食べて行って。」
オクロがニナを見てそれからワウレを見た。ワウレが小さくうなづく。ニナがタラナを見た。
「行ってらっしゃい。」
タラナが言うとニナはうなづいてオクロと一緒に奥に入って行った。
「タラナ姫。」
ワウレが声をかける。
「…わざわざご足労おかけしました。」
タラナが礼をする。
「…いえ。これは私の大事な務めですゆえ。」ワウレは言った。
「…それにしても…良い御子だ。父君にも母君にもよく似ておられる。」
「……。」「あの真っ直ぐな御気性、何よりもはっきりした自分の意思をお持ちだ。…良い戦士になられますな。父君にも劣らない。」
「ありがとうございます…。」
タラナは少し寂しそうに微笑んだ。
「タワンティンスーユの予言者たるあなたにそう言っていただけると…私も安心します。」
「クスコではあなたの姉君が御待ちです。御夫君のチャルクチマ将軍と。」
「ロント姉様。」
タラナは小さく言った。
「そうです。…首を長くして御待ちですよ、あなたとニナを。」
「……。」
タラナは手を握り締めた。
「…ロント様だけではない。皆が待っております。あの方の御子がクスコに戻って来られるのを。」

ワウレが静かに言った。
「…中でも、皇帝陛下が。」
「ワウレ様。」
タラナが言う。
「…ひとつ、御聞きしてもよろしいでしょうか。」
「なんなりと。」
「あの方は…今、どうしておられますか？クスコにおられるのですか？」
ワウレがタラナを見つめ返した。そして一度静かに目を伏せてから口を開いた。
「いいえ。」
ワウレは遠くを見た。
「あなたが身重の体でティティカカへ去った後―あの御方は自らクスコを出られました。…その後の行方は誰にもわかりませぬ。…皇帝陛下ですら。」「……。」
「タワンティンスーユ1の“眼”を持つ者にもわかりませんでした。」
それがどういうことを意味するのか―タラナには十分わかっていた。
ややしばらくしてタラナは口を開いた。
「―もし。」
声がかすれている。「―もし、あの時…私たちが巡り合わなければ。」
タラナは言った。
「あの方も…クスコを出られることもなく…。」
「タラナ姫。」
ワウレが言った。「それは7年前にもお話したはずです。…すべては運命。時の流れに従って未来へ向かって進むものです。…それは誰にも容赦はない。例えそれが―王―インカ―であろうと一介の人民であろうと。」
「…ワウレ様。」

「…ご自分だけを責めてはいけない。」
ワウレは言った。
「…確かに神は時に厳しい試練を与えられますが…人は必ずやそれを乗り越える強さと―力を持っている。」
「……。」
「…あの御方も…ニナも。…そしてあなたも。」
タラナは黙ったまま両手を胸の前で合わせて握り締めた。

帰りの舟の上でニナとタラナの様子は対称的だった。ニナはオクロにクスコの話を聞いたらしく、うきうきした様子でその話をしていた。―しかし、タラナは。
「…それでね。オクロ様がね、“見せて”くれたんだけど―。」
ニナが言いかけてやめた。
「母様？」
「…え、ああ、ニナ…。」
「どうしたの？僕の話…聞いていた？」
ニナに言われタラナはニナの髪をなぜた。
「あ…ごめんなさい、少しぼんやりして。」
「母様、クスコに行きたくないの？」
タラナがハッとしてニナを見た。ニナの瞳が真っ直ぐにタラナを見ている。
「ううん、そんなことはないのよ。」
「じゃあ、どうして？」
ニナが言う。
「母様…迷ってるんでしょ。僕にはわかるもの。」
「…ニナ。」
タラナがもう一度ニナの髪をなぜてからニナを抱き締めた。
「…そうね…母様…迷っているわ…。」
「なぜ？クスコではみんな待ってるってオクロ様が言っていたよ。」
「心配なのよ…クスコは遠いから。」

「大丈夫だよ、母様。」
ニナはタラナにギュッと抱き付いた。
「…僕が一緒だもの。僕が母様を守ってあげる。」
「…ニナ。」
「ずっと…ずっとだよ。絶対に。」
―
「…そなたのことは私が守る。」
ふいに―蘇るのは懐かしい人の声。
―
「必ず―この命に替えても…。」
タラナが口の中で何かつぶやいた。ニナが顔を上げる。「ありがとう、ニナ。」
タラナは笑ってニナの頬をなぜた。
「優しい子ね。…母様、ニナが大好きよ。」
「僕も！」
ニナがまたタラナに抱き付いた。そのニナを抱き締めてタラナの瞳が遠くを見つめていることを―誰も知らなかった。

タラナとニナを乗せた舟が遠ざかって行くのを神殿の窓からワウレが見つめていた。
「チチャでもいかが？」
オクロが言った。ワウレが振り向く。
「ありがとうございます。」「…いい子でしょう？」
オクロは笑った。
「ええ、本当に。いずれは…タワンティンスーユでも屈指の戦士ーアウカーにおなりでしょう。」
「戦士ーアウカーですか。」
オクロは溜め息をついた。
「…王ーインカーではないのですね、やはり。」
「オクロ様。」

「わかっています。…父上の最後の希望もこれでついえたと言うこと。」
「…終わりではありません。」
ワウレが静かに言う。
「希望は持つのを諦めたら終わるのです。…皇帝陛下はまだ諦めてはおられない。…何とか―この国のために未来を手に入れようと努力されている。」
「それは…わかっています。」「ニナを…クスコへ呼び寄せるのも…すべてはそのためなのでしょう？」
「ええ。」
「…いくら運命とは言え、何と残酷なことでしょう。」
「あの時、ニナを助ける道はこれしかなかったのですよ、オクロ様。」
ワウレが言う。
「そして、あの方は―ニナとタラナのために御自分であの道を選ばれた。」
「そうね。…そうだったわね。」
オクロは溜め息をついた。
「ひとつ、心配な事があるのよ。」
「…ワスカル様、ですか。」
ワウレが言った。
「…そうよ。ワスカルが…黙っていないわ。ニナが戻ればね。」
「わかっております。」
「あなたのことだからうまくやってくれるとは思うけど…頼みますね。」
「はい。…承知しております。」
ワウレは深々と頭を下げた。

第七章　旅立ち

翌々日の朝、ワウレは何人かの従者を引き連れ、数頭のリャマと共にやって来た。タラナとニナは身の回りのものくらいしか荷物もなく—見送りに来てくれた数人の村人と村長に別れを告げると一行は早々に出発した。一人ではしゃぐニナを見てワウレは笑った。

「…遠出は初めてのようですね。」

「ええ…これ、ニナ！」

タラナが苦笑する。

「…お気になさらずに。あのぐらいの男の子は元気なほうがいい。羨ましいくらいだ。」ワウレが言った。

タラナがワウレを見る。

「お子様は…お二人でしたね。」

タラナが言う。ワウレはうなづいた。

「ええ。娘と息子と…もうじきもう一人息子が生まれます。」

「そうですか…。」

タラナはうなづいた。

「娘は今年9歳になります。…息子は6歳。娘は明るい子なのですが…息子がどうもね。」

ワウレは苦笑した。

「人見知りというか…引っ込み思案というかおとなしくて…。…ニナくらいの元気があればよいのだが。…いずれは人前で“語る”ことが生業にせねばならないのですがね。」

「まあ。」

タラナが笑った。

「でも、そのご子息は“キーヤ”なのでしょう?…あなたの後継者なのですよね。だったら大丈夫…きっと立派な予言者におなりですよ。」

「だといいのですが。」

「母様―！」
はるか前方からニナが手を振る。タラナは手を振り返した。
そして、その旅はニナにとって初めて見る物、聞く物ばかりであった。
自分達が歩く石畳の立派な道は皇帝陛下が造ったクスコへの道であること―。
ところどころで泊まった宿場―タンボ―で出会う見も知らぬ土地の人々。
中には公用語―ルナシミ―であるケチュア語を話せない人々すらいた。いつも好奇心いっぱいの瞳でなにもかもを見つめていたニナをタラナは少し寂しそうに、だが嬉しそうに見つめていてくれた。でも、目に入るすべての物よりも―ワウレが語ってくれるクスコの様子―タワンティンスーユの話の方がはるかにニナは興味を持った。
黄金の神殿―コリ・カンチャ―、町並み、行き交うたくさんの人々。
ニナにとっては想像を越えた街であることは間違いなかった。
しかし―クスコが近付くにつれて―タラナの表情が冴えなくなっていくことに―気付くにはニナはまだ幼すぎた。

「ねえ、母様。」
ある夜、寝床の中からニナが聞く。
「なあに、ニナ。」
タラナが髪をとかしながら言った。
「…母様は…クスコに行ったことがあるの？」
「…どうして？」
「…なんとなく…行ったことがあるのかなって。」
「……ニナ。」
タラナは困ったように言った。そして大きく息を吐いて答えた。「あるわ。」
「本当？すごいなあ。…コリ・カンチャって見た事ある？」

「ええ。」
タラナはうなづいた。
「…そうか…早く見たいなあ…僕も。」
「ニナ。」
タラナはニナに近付いて頭をなぜた。
「早く眠りなさい。明日も…早いわよ。」
「はぁい。」
ニナは答えて毛布にもぐる。そこでもうひとつ思い付いたように顔を出す。
「母様。」
「何？」
「…クスコには父様もいるの？」
ニナの言葉にタラナの表情が―変わる。ニナはそれには気付かずに大きくあくびをした。
「…僕…父様に…会いたいなぁ…」
「……。」
タラナはニナをのぞきこんだ。ニナはタラナの答えを待たずに眠りについてしまったようであった。タラナは一度目を閉じてから天を仰ぐ。
―あなた。
閉じた瞳から涙が流れた。
―私は…どうしたらいいのですか…

そして―ついに。「ごらんなさい、ニナ。」
ワウレがニナを呼んだ。
「あれがクスコです。皇帝陛下のおわす世界の中心―クスコ―」
山間に―わずかに金色の町並みが見える。
「ここまでくれば…もう安心です。明日の夜にはクスコでゆっくり休めますよ。」
「うわあ…」

背伸びをするようにニナが遠くを見る。ワウレが声をかける。
「…見えますか？」
「うん…でも。」
ニナが目をこする。「ごらんなさい、ニナ。」
ワウレがニナを呼んだ。
「あれがクスコです。皇帝陛下のおわす世界の中心ークスコー」
山間に—わずかに金色の町並みが見える。
「ここまでくれば…もう安心です。明日の夜にはクスコでゆっくり休めますよ。」
「うわあ…」
背伸びをするようにニナが遠くを見る。ワウレが声をかける。
「…見えますか？」
「うん…でも。」
ニナが目をこする。「なんだか目が変…」
「かすんで見えますか？…ほう、するとあなたは“眼”をお持ちか。」
「“眼”？」
「…そうです。あなたが今見ているのは結界ですよ。」
「結界…。」
「そう…クスコはインティ・ワタナ—太陽を結ぶ石の結界で守られています。あなたはそれが見える。」
「うん…」
目をこすりながらニナはうなづく。
「…結界を見分けられるというのは戦士ーアウカーとして重要なこと。」
ワウレが微笑む。
「皇帝陛下は良い戦士を手に入れられた。」
ニナは嬉しそうに笑った。
「さあ、もう日が暮れる。今夜はここで天幕をはりましょう。天幕で泊まるのも今夜が最後ですから。」

召使たちが天幕を張るために忙しく働いている時―ワウレはふとタラナがじっとクスコを見つめているのな気がついた。
「タラナ姫。」
声をかけるといつもと同じように寂しげに微笑む。
「どうなさいました？」
「…いえ。」
タラナは答えた。
「…あのお方のことを考えておられたのですね。ワウレが言う。タラナは少し笑ってうなづいた。」
「ええ。…でもクスコへ行ったら…あの方のことは考えてもいけないのですね。…回りの方々にもわかってしまうでしょうし。」
「…姫。」
ワウレは言った。
「皆がすべて心の中をわかるわけではありませぬ。」
「ええ。」
タラナは答えた。
「…そうなのでしょうね、きっと。」タラナの目がふと天幕を張るのを手伝うニナに止まった。
「タラナ姫。」
ワウレの声にタラナは振り向く。
「―今夜から始めたいと思います。…クスコに入る前に終わらせたいので。」
「……。」
タラナは小さくうなづいた。
「…今夜のニナの食事に…薬草を混ぜます。」
「…それは…。」
「ご心配なく。…眠らせるだけです。コカに似た薬ですが…コカより眠りが深い。」
「……。」
「…王族の血が濃い程ヤワル・ユヤイ―血の記憶は鮮明なのです。

ニナは父君からもあなたからも王の血をひいておられますから。」
「…わかりました。」
「…眠っている間にすべて終わりましょう。目が覚めるとそこはクスコです。」
「…よろしくお願いします。」
タラナは深々と頭を下げた。

第八章　別れ

いつものように隣りに母がいて一緒に食事をしている。なのに―何か違う。何が違うのかよくわからないけれど―。母はいつもより寂しそうに見える。笑ってはいるけれど。なぜだろう？やはり母はずっとティティカカにいたかったのだろうか？母を迷わせるもの、恐れさせるものが―クスコにはあると言うのだろうか。皇帝陛下のおわすクスコ、世界の中心―。

「母様。」
ニナが口を開いた。タラナがニナを見る。
「やっぱりぼく、クスコには行かない。母様とティティカカに戻る。」
母が驚いた顔でこちらを見ている。何か言っているようだけど―よく聞こえないのはなぜだろう。まるで水の中にいるみたいだ―。

「…ニナ、今更何を…。」
タラナが言った。ニナは首を振る。
「…行かない…クスコには…。」
そこまで言うと―ふわりとニナの体が倒れかかりタラナが両手で小さな体を受け止めた。
「…ニナ！」
ニナはタラナの腕の中で意識を失っていた。
「勘の良い御子だ。」
ワウレが言って立ち上がった。
「我々が自分に何かしようとしているのを察したのでしょう。」
「……。」
タラナの手がニナの髪を優しく何度もなぜた。

「可哀相だが…しかたがない。」
ワウレは言った。
「…タラナ姫、もうじきクスコから迎えがまいります。」
「え…？」タラナがワウレを見る。
「…チャルクチマ将軍が皇帝陛下の命で何人か“翔べる”者をこちらに差し向けてくれるはず。…今夜、クスコに入ります。」

「…ワウレ様…。」
「…よろしいですね？」
「……。」
タラナが何か言おうとした時、急に外が騒がしくなった。ワウレが振り向くと同時に一人の男が天幕に入って来た。
「—ワウレ。」
男が言った。
「…そこにいるのが、兄上の子か。」
「ワスカル様。」
ワウレが言った。タラナがハッと顔を上げた。ワスカルはワウレの答えを待たずにタラナとニナに近付いてその前に膝をつくと二人を見た。
「—久しぶりだな、タラナ。…そなたは…変わらない…子を産んでも…兄上が愛した時のままだ。」
タラナは下を向いた。
「…この子が兄上の子…。」
ワスカルが言ってニナを見つめた。
「…似ている。」
つぶやくようにワスカルが言った。
「幼い頃の…兄上に…瓜二つだ…。」
そう言うと愛しそうにワスカルはニナの髪をなぜた。
「これから、何をするつもりだ、ワウレ。」
ワスカルはワウレに背を向けたまま言う。

「…薬を飲ませ…クスコへ連れて行き―何をするつもりかと聞いている。」
「―お答えする義務はございません。」
「何?!」
ワスカルが振り向く。
「…そなたは誰に向かって言っているつもりだ?」
「―あなたがどなたかはよく存じ上げております、ワスカル様。我らが偉大なる皇帝ワイナ・カパック様の皇子、ワスカル様。…しかし、我々は今は皇帝陛下の命で動いております。たとえ何人たりとも妨げることは許されません。」
「それでは。」
ワスカルが言った。
「…私の命は聞けぬ、と申すのだな。」
「……。」
ワウレは黙ってワスカルを見ている。
「…よかろう。」
ワスカルは言ってタラナを再び見た。
「タラナ。」
タラナがニナを抱き締めてワスカルを見た。「…そなた、この者たちが兄上に何をしたのか、知っているのか?」
タラナは答えない。
「…この者たちは―父上と共に兄上を―」
「皇子!」
ワウレが静かだが鋭い声で言った。
「それをタラナ姫に語るおつもりか!」
ワスカルは答えない。
「―それは皇帝陛下が封印されたこと。…他言することはたとえあなたと言えども―反逆と見なされても何も申し開き出来ませぬぞ!」
「……」
ワスカルは舌打ちをした。そしてワウレをチラッと見てからタラナ

を見た。
「…私のところへ、来い、タラナ。」
ワスカルは言った。そして手を差し延べる。
「決して悪いようにはしない。兄上の妃とその子としてふさわしい暮らしができるよう取り計らおう…。」
タラナはワスカルの手をじっと見た。そして小さく首を振る。
「…それはできません。」
小さい声だがはっきり答える。
「…これ以上皇帝陛下に逆らうことなど…できません。」
「タラナ！」
ワスカルがタラナの腕をつかんだ。
「…わたしと…この子がここでこうやって生きているのはすべて皇帝陛下のお慈悲のおかげです。それを裏切ることはできません。」
「何を言っているのだ、タラナ！」
ワスカルは言った。
「…あれは父上の慈悲などではない、
父上も叔父上も―そなたとその子の命を盾に兄上のすべてを奪ったのだ…心め体も何もかも…そなたは知らないのだ、タラナ…兄上がどうなったのか、どんな目にあったのか―」
「ワスカル様！」
ワウレが叫ぶ。
「それ以上はおやめ下さい！姫は何も知らない―。」
「…兄上は！」
「―知っています。」
ワスカルはハッとした。ワウレも驚いてタラナを見る。タラナの瞳から涙があふれて抱き締めているニナの頬に落ちた。タラナはまっすぐに二人を見ている。
「あの方は…私に話して下さいました。」
タラナは言った。
「…あの方が…最後に…すべてお話しして下さったのです…あの方

は…自分のすべてを…私とこの子の為に…いえ、タワンティンスーユの民の為に…差し出すのだと…。」
タラナの瞳から涙が止めどなく落ちる。
「そして…すべてをかけて…私を守って下さると…約束してくださった…。」
タラナはニナを強く抱き締めた。
「…私と…この子を…」
言葉を失ったワスカルがタラナの腕から手を離す。
「ワスカル様。」
タラナが涙を浮かべた瞳でワスカルを見た。
「…お気持ちは嬉しゅうございます…あなたの兄君のすべてを奪うこととなった私にそのようなお心使い…きっと兄君様も…お喜びでしょう。」
声が震える。タラナは小さく嗚咽して続けた。
「でも、もう…わたしに関わることは兄君も父君の皇帝陛下もお望みになりますまい。これ以上…私たち親子のことはどうかお気にならずに。貴方様は王となりこのタワンティンスーユを守る、大事なお役目があるのですから。」
静かな声ではあったがその中にワスカルに対するはっきりとした拒絶の意志を感じられてワスカルは首を振った。
「タラナ、よいのか？」
タラナはうなづく。ワスカルは悲しげに目を伏せもう一度タラナを見た。そして何か言いたげにしていたがやがて立上がり踵を返した。そしてワウレに向き合う。
「―ワウレ。」
ワウレがワスカルを見た。
「―父上に伝えるがよい。…タラナとニナに何かあればこの私が…許さぬと。」
ワウレは何も言わずただ最敬礼をした。ワスカルは天幕の外へと出て行きその気配も消えた。ワウレはそれを見送るとタラナを見た。

「……タラナ姫。」
タラナはニナの髪をなぜながらこぼれ落ちる涙をぬぐおうともしない。
「…ご存じ…だったのですね。」
タラナは小さくうなづいた。ワウレは溜め息をついた。
「…私も…あの方と…約束したのです。」
タラナは言った。
「この子を守るって。私の…全身全霊をかけて…守るって。」
「―。」
それはワウレが初めて見るタラナのほとばしるような激しい―強い思いだった。多分―ニナの意識がないせいだろう。ニナに感づかれる心配がないから―とワウレは思った。
「…ワウレ様。」
タラナはかすれた声で言った。
「…お願いが…ございます。」
「…なんでしょうか？」
「…この子を…姉様のところに…送り届けていただけますか？」
「―！」
ワウレが驚いてタラナを見返す。タラナは涙を浮かべたまま微笑む。
「―ずっと考えていました。」「…姫。」
「…私はクスコに行かない方がいいと思います。」
「タラナ姫…しかし…。」
「いくら皇帝陛下があの方の名前と共にすべてを封印したとしても―私がいればきっと、思いだすお方もおありでしょう。…そのことでこの子が傷つくのは見たくない。」
「…タラナ姫、それは…。」
違う、と言おうとしたワウレにタラナは首を振った。
「…ワウレ様、私とて…王族なのですよ。」
「……。」
ワウレは溜め息をついた。そしてややしばらくして口を開いた。

「これから…どうするおつもりですか？」「…ティティカカに帰ろうと思います。…オクロ様の元に行こうかと。」
タラナは涙を拭いた。
「…お願い…できますか？」
「…タラナ姫。」
ワウレはタラナを見た―7年前に見た光景とその瞳が重なる。
「貴女は…強い御方だ。」
つぶやくようにワウレは言った。―まだ年若い娘が、皇帝を目の前にしても少しも動じず―己の意志を伝えたのだ。
「すべては…この子の為ですから。」
タラナは笑った。
「この子がクスコに入れば…一安心です。」
「…わかりました。」
ワウレは最敬礼した。タラナは小さくうなづくとまた口を開いた。
「―それと、もう一つだけお願いがあるのです…。」

天幕の外で人の気配がする。
「―ワウレ様。」
かすかな声がしてワウレはうなづいた。
「今、行く。」
ワウレはタラナを見た。
「タラナ姫。」
タラナもうなづいてニナを抱き上げて立ち上がる。天幕の外に出ると松明の明かりに照らされて―数人の屈強な戦士がひざまづいているのが見える。
「ご苦労。」
ワウレが言った。
「この御子だ。くれぐれも丁重にな。」
「わかりました。」一人が立ち上がり、タラナの前に立つとニナを

受け取った。
「お預かりします。」
「よろしくお願いします。」
タラナは頭を下げた。
「では、タラナ姫。」ワウレが言った。タラナはもう一度ニナを見てその髪を撫ぜた。そしてその頬に自分の頬を寄せた。
「―元気で…皆の言う事をよく聞いて…良い大人になりなさい、ニナ。立派に皇帝陛下のお役に立てるように―。」
そこまで言うとタラナは自分の首から何か外してニナの首にかけた。
「一緒よ。」
タラナは囁いた。
「母様はずっと…あなたといるわ…あなたを見守っているから―。」
タラナはもう一度髪を撫ぜて―名残惜しそうに手を離した。
「よろしくお願いします。」
タラナが深々と頭を下げた。ニナを抱いた戦士は小さくうなづくとその姿はかき消えた。“翔んだ”のだ。「…では、姫。私もまいります。」
ワウレが言う。
「…はい、ありがとうございました。」
タラナは頭を下げた。
「…いえ。ニナのことは…私も責任を持ってお守りします。」
「はい。本当にいろいろと…ありがとうございました。…皇帝陛下を始め大神官様、他の王族の方々にもくれぐれもタラナが深く感謝していたと―お伝え下さい。タラナはいつもタワンティンスーユの平和を願い、皇帝の御世の末永く続くことをお祈りしています、と。」
「しかと承りました。」
ワウレは最敬礼した。
「…タラナ姫もどうぞ御息災で。」
「ええ。」

タラナもうなづいた。「あなたも。タワンティンスーユの月にして予言者ワウレ様。」

そして—最後に微笑んだタラナは誰よりも美しく誰よりも誇り高く見えた。まるでそれは—タワンティンスーユの皇女のようにすら見えた。

第九章　暁のクスコ

ほの暗い月の女神の神殿の奥の広間に今、数人の男達が集まっていた。男達が円座になっている真ん中にはただ何も知らずにこんこんと眠るニナの姿があった。

「―この子がニナか。」

男の一人―極彩色の羽根飾りを頭につけた男が黄金の首飾りを揺らして言った。

「―はい。クシ・トゥパク様。」

―男たちの中にいたワウレが答える。

「…あれの忘れ形見…。」

クシ・トゥパクと呼ばれた男はつぶやく。

「―兄上。」

クシ・トゥパクはただ一人低い椅子に座る男を見た。端正な顔立ち、思慮深そうな瞳。年の頃は５０歳前後か。額に幾重にも巻かれた緋と金の糸で編まれた組み紐と一際鮮やかな羽根飾り、それにいたるところに黄金の装身具を身につけている。彼こそが―タワンティンスーユの現皇帝、ワイナ・カパックであった。

「…何と…よく似ておられる。」

クシ・トゥパクはつぶやいた。

「ええ。」

ワウレはうなづいた。

「幼い頃の…あの御方によく似ておられます、すべて。」

「……。」

ワイナ・カパックがすっと立ち上がるとニナに近付いてその額にかかる髪をかき上げる。

「…母親にも似ている。…美しい子じゃ。」

ワイナ・カパックは言った。

「…タラナは？一緒ではないのか。」

「…それが…ティティカカに帰りました…どうしても…クスコには入れないと。」
ワウレが答えた。
「…そうか。聡明な娘だったが…やはり、な。」
「ワウレよ。」
クシ・トゥパクが言う。
「封印はできるのか？」
「…はい。…ニナにはまだ王族としての自覚はありませんゆえ。―ただ。」
「―ただ？」
クシ・トゥパクが聞き返す。
「タラナが…自分についての記憶を消してほしいと。」
ワウレが言った。
「…母親の記憶を消せ、と申すのかタラナは。」
ワイナ・カパックが言ってニナの髪を撫ぜた。ワウレはうなづく。
「…はい。クスコで生きていくためには…過去のすべてを封印しておかなければならないと―。自分の思い出は不要だと。」
「…哀れな子よ。」
ワイナ・カパックは言った。
「…生まれながらにして、重い宿命を背負い…そして、父を失い、今また母の思い出すら奪われようとしている…。」
「…皇帝陛下。」
「…あのものたちは呼んであるか。」
「…は。」
クシ・トゥパクがうなづく。
「仰せとあれば、すぐにでもここに。」
「……。」
ワイナ・カパックはしばらく何かを考えているかのように黙った。
そしてようやく重い口を開いた。
「―あの者たちを呼べ、ワウレ。」

「は…。」
「…よいか。今度は失敗はならぬ。…くれぐれも慎重に事を進めよと伝えよ。」
「御意。」
そこまで言ってワイナ・カパックはワウレを見た。
「タラナの望むとおりのするよう、伝えよ。」
「…は。」
ワウレも深々と敬礼をした。ワイナ・カパックはまた二ナを見た。
「のう、ワウレよ。」
「はい。」
「…そなたの息子のキーヤも…この二ナと同じ位の年頃であったな。」
「はい。」
「…そなたはどう思う?…余は…ひどい祖父かのう。」
ワウレは言葉を失う。クシ・トゥパクが悲しそうな顔をする。
「…真実を知ったら…この子はどう思うかのう…ただ…父と母の事を…恨むことは…してほしくない…。」
「陛下。」
ワウレが言った。
「…わかっておる。」
ワイナ・カパックは答えた。
「…わかっておる、ワウレよ。…これは余の小さな感傷じゃ…。」
ワイナ・カパックの目が遠くを見た。
「…では、余は王宮に戻る。後は任せた。」
「は…。」
クシ・トゥパクとワウレが深々と頭を下げるとワイナ・カパックの姿がスッと消えた。
「……。」
「…辛い役目だな、ワウレ。」
クシ・トゥパクが言う。ワウレは答えず言った。

「…とにかく始めましょう…夜明けまでには終わるでしょうから。」
「…そうだな。」
二人が顔を上げるといつの間にか長い衣をすっぽりと頭から被った数人の人物が立っていた。まるで影のような。
「連れて行ってくれ。私もすぐに行く。」
ワウレの言葉に影がうなづいたかのように見え…二ナの体を抱きかかえるといずこへともなく姿を消した。

ー彼は…一人歩いていた。それは長く続く一本の道だった。あたりは白い霧で覆われていて彼の目の前の道しか見えない。その道を彼はひたすら歩いていた。

その夜のことは…彼ー二ナは長い間思い出さなかった。その夜、彼に何があったのかはーすべては闇の中だった。彼がそれを思い出したのはー彼が二ナではなく別の名前で呼ばれるようになってからだった。

夜明け近くなって―。クスコの街のとある館にワウレはいた。
「…待たせてすまぬ。」
部屋に入ってきたのはよく日に焼けたがっちりした男だった。続けて一人の女性も入って来た。
「…いえ。こんな時間にこちらこそ申し訳ない。」
「…ワウレ様。」
女性が声をかける。
「…その子が…ニナですか。」
「そうです、ロント。」

「おお…。」
ワウレの後ろには例の影のような人間が立っており―その手にはニナが抱かれていた。ロントはその人物に近付くとその腕からニナを受け取った。
「…ニナ…。」
ロントはニナを強く抱き締めた。
「…2～3日は眠っているでしょう。」
ワウレは言った。
「…タラナに…似ているわ。」
ロントはニナに頬ずりした。
「…あの御方にも似ている。」
男―チャルクチマが微笑んだ。
「…大事に育てよう。…あの方やタラナの分も。」
「……ええ。」
ロントの瞳から涙が落ちた。
「…ロント…この子には母親はいない。」
ワウレが言う。
「…それがタラナ姫の願いです。」
「ええ…わかっています。…あの娘ならそうするだろうと…思っていました。」
「…私の側妻の子供ということにするつもりだ。…母は死んだと話そう。」
チャルクチマは言った。
「それなら…問題あるまい。」
「それが…よろしいでしょう。」
ワウレはうなづいた。
「…これからニナの生活には新しいことがたくさん入り込んで来る…おそらく過去など振りかえる暇はないはず…。母の記憶がないことなど…気にはならないでしょう。」
「ヤチャイワシ（学校）に行かせてやらねば。」

チャルクチマは言った。
「たくさんの友を作って…たくさんの事を覚えて。」
チャルクチマの大きな手が眠っているニナの頭を手荒く撫ぜた。
「…いろいろなことを教えてやろう、ニナ。…私の戦士としてのすべてを。」
「…あなた。」
ロントが涙を落とした。「これで私も安心しました。…どうかニナをよろしくお願いします。」
ワウレは笑った。
「ワウレ様…ありがとうございました。」
ロントが言うとワウレはうなづいた。
「では、チャルクチマ将軍、ロント。」
ワウレは頭を下げた。ニナを抱いていた影の様な人物とワウレはスッと消える。残ったロントはもう一度ニナを強く抱き締めた。
「ロント。もうタラナのことは口外はすまい。」
チャルクチマが言うとロントはうなづいた。
「…ええ…もちろんですわ…この子は私の子…本当の私の子と思って育てます。」
「それがいい。」
チャルクチマはロントの肩を抱いた。

―もうすでに東の空がしらみかけていた。ワウレは太陽に祈ってから大きく息をついた。
「―長い夜であったな。」
誰に言うともなくつぶやく。
「―ワウレ様。」
ワウレに今まで黙って従っていた例の影が布の奥からくぐもった声で言う。
「…では我らもこれで。」
「…そうか。…いつもすまぬ。…そなたたちにばかり負い目を…。」

「いえ。それが我ら一族の務めですゆえ。」
「いずれまたそなたたちの力を必要とするときが来る。その時は…また頼む。」
「はい。」
影の姿が消える。ワウレは天を仰いでから歩き出した。そして大きな館のひとつに入って行った。
「―あなた。」
そこはワウレの家であった。家の中では暖を取る火の前で一人の女性が座ってワウレを待っていた。
「…ミカイ。起きていたのか。」
ワウレの妻のミカイが立ち上がろうとする。
「立上がるな…先に休んでおればよかったのに…腹の子にさわる。」
ミカイの側にワウレは座った。
「…すいません…どうしても気になって眠れなくて。」
ミカイは溜め息をついた。
「子供のことか。」
「……。」
ミカイは小さくうなづいた。
「チャルクチマ将軍なら大丈夫…ちゃんとあの子を育ててくれるだろう。
あの子はいい子だ…立派な王族になろう。」
「可哀想な御子。…キーヤと変わらない年頃なのに。」
ミカイが涙ぐむ。
「…我々も…あの子を守ってやろう。…それがタラナの気持ちに報いる…唯一の方法だろう。」
「ええ。」
ミカイはうなづいた。
「さあ、ミカイ。安心したなら少し休もう。来月にはその子も生まれてくると言うのに体を大切にせねばいけない。」
「はい、あなた。」

ミカイはワウレに助けられて立上がった。「大丈夫か？…先に休んでいなさい。後から行くから。」
「…あなた？」
「…いや…キーヤたちの顔が見たいから…すぐ行く。」
「ええ。」
ミカイは小さくうなづいて奥へ入って行った。ワウレが子供部屋に入って行くと長女のオクリョはぐっすりと眠っていた。その寝顔を見て頭を少し撫ぜるとワウレは反対側の部屋の長男キーヤを見に行った。眠っているようであったが―ワウレがのぞきこむとキーヤはパッチリ目を開けた。「キーヤ。」
ワウレが少し驚いて言う。
「起こしてしまったか？」
キーヤは首を振った。
「…お帰りなさい、父上。」
「ああ、ただいま。」
ワウレは微笑んでキーヤの頭を撫ぜた。
「きちんと留守を守ってくれたらしいな。よい子だ、キーヤ。」
「父上。」
キーヤは固い表情で言う。
「…今夜、クスコに誰かお連れしたのですか？」
ワウレの表情が一瞬変わる。
「どうしてそう思う？」「―大きな星が動いています。」
キーヤは言った。
「とても…大きな星…あれは…金星。」「キーヤ。」
ワウレは言った。
「…そなたにはわかるか。…あの子の運命が見えるのだな。」
キーヤは答えずにただワウレを見上げる。
「…父には今は何も言えない。だがいずれ彼が真実を欲した時は―。」
ワウレはそこで一度黙った。そして思い切ったように口を開く。

「助けておやり、キーヤよ。」
「…はい。」
キーヤは大きくうなづいた。

第十章　新しい日々の始まり

―三日間眠り続けてニナはようやく目を覚ました。

「…ん。」

目をこすりこすりニナは体を起こした。辺りを見てニナはキョトンとした。見た事のない立派な部屋だった。

「…え…？」

ここはどこ、と聞こうとしてニナはふと自分の首に何かかかっていることに気付いた。それは黄金でできた小さな鳥の形の首飾りだった。

「……。」

手で持って眺めてみる。

「…あら。」

女性の声でニナは部屋の入口に目を向けた。

「目が覚めたのね、ニナ。」

「……。」

ニナはボーッとその女性を見た。

「まだ眠そうね…。でももう起きなさい。」

「……。」

ニナはまた目をこする。

「…ここはどこ？」

「あらあら寝ぼけてるの？」

女性は笑った。

「あなたはワウレ様に連れられてここに来たのよ、クスコへ。忘れちゃったの？」

温かい手に頭を撫ぜられてニナは女性を見た。

「クスコ…。」

「そうよ。おなかは空いてない？今、食事を準備するわ。…食べた

ら湯浴みをして新しい服に着替えて…。」
そこまで女性が言ったところに一人の男が入って来た。
「おお、目が覚めたか、ニナ。」
よく日に焼けてがっしりとした見るからに歴戦の戦士と言う感じの偉丈夫を絵に描いたような男だった。
「これ、そなたは父の顔まで見忘れたのか？」
男は笑った。男は笑った。
「―これまで放っておいて今更父もないですわ、あなた。」
「―おお、これは手厳しいな、ロント。」
男―チャルクチマは笑った。
「放っておいたわけではないぞ―ニナの母が産後に病になって―ニナを連れて故郷に帰ってしまったのだからな。」
「…父様…？」
ニナが不思議そうに言う。
「…そうよ。そして私があなたのお母さん。」
ロントが笑った。
「…あなたの生みのお母様は亡くなられたそうだけど…今日から私がお母さんになるわ。」
「お母様…。」
ニナはつぶやいた。なんだか現実感がない。しばらくぼんやりしてからニナは口を開いた。
「ここは僕の家？」
「そうよ。」
ロントがうなづく。またニナが黙る。ロントとチャルクチマが反応を待つようにニナを見た。やがてニナは口を開いた。
「―お腹空いた。」
二人は顔を見合わせて笑い出した。
「そう、そうね、ニナ。食事にしましょうね。」
「よし、ニナ。」
チャルクチマがたくましい腕でニナをひょい、と抱き上げた。

「一緒に食べるとするか。」
ニナはコクンとうなづいた。

光り輝く黄金の宮殿の廊下を一人の男が早足に歩いていた。男は一番奥の広間の前に立った。入口には二人の戦士が立っていて男に礼をした。
「―父上はおられるな。」
男は―ワスカルだった。
「…はい。」
「お目通り願いたい。良いな?」
ワスカルは護衛の返事も待たずに中に入った。ワイナ・カパックは正面の玉座に座り一人の男と謁見中だった。
「なんだ、ワスカル。」
ワイナ・カパックが言う。
「―入室は許可しておらぬ。外で待て。」
「―なぜニナをチャルクチマに渡したのですか?」
ワスカルがワイナ・カパックの言葉を無視するように言う。
「よりによってなぜ―。」
「…チャルクチマの妻はタラナの姉だろう。」
ワスカルがムッとしたような謁見していた男を見た。声の主はその男だった。
「―だったら何も不思議はないはず。」
「そなたに言ってはおらん。」
ワスカルは言った。
「―チャルクチマは私の部下だ。」
男は言って立ち上がる。
「チャルクチマでは不満か?あの子の養父が。」
「よさぬか、アタワルパ。」
ワイナ・カパックが言った。

「ああ、不満だ。」
ワスカルが言った。
「そなたの部下だからな。」
「これは笑止。ではどうするおつもりかな、ワスカル。そなたが引き取る気か？聞けばニナと言う子供はタラナにも兄上にもよく似ているとか。―そなたが引き取ればいくら父上とて噂が広まるのは止められまいよ。そのぐらいわからぬそなたではあるまい？」
アタワルパは半分嘲笑するように言った。
「キトーにでも連れて行かれては困るからな。」
ワスカルが言った。
「…キトーは空気が熱く澱んでいると聞く。クスコねように良い風が吹かないのだろう。」
今度はアタワルパがムッとしてワスカルを睨む。ワスカルはしてやったりとばかりに続ける。
「―あのようなところではどんなにインティのご加護があろうと誰でも病になるわ。」
「何を…！」
アタワルパがワスカルに掴み掛かろうとする。
「やめんか！！」
大きな声ではないが鋭い“声”が耳と頭に直接響いて二人は顔をしかめた。ワイナ・カパックが二人を睨みつけている。「いいかげんにせんか！ニナをチャルクチマに預けたのは余の決定だ。それが不満か、ワスカル。」
ワスカルは黙ったまま父を見る。
「アタワルパが申すようにそなたが引き取ればニナに余計な詮索をする輩が必ず現れよう。…ロントはニナの肉親だ。チャルクチマとの間に子もいない。チャルクチマにも異存はなかった。それに―。」
ワイナ・カパックが息をつく。
「元々、チャルクチマはあれの部下だった。…あれの近くで…あれを一番よく理解していた。ニナの父親には相応しいと思わぬか、ワ

スカル？」
ワスカルは答えないで顔を背ける。アタワルパがフン、と鼻先で笑う。
「アタワルパ。そなたもキトーを守るつもりがあるのはわかるが、先ほどの態度は上に立つ者として相応しいと言えるか？…そなたのその短慮な行いがある限りコリ・ティカも心と体を休める暇がなかろう。」コリ・ティカの名前を出されてアタワルパの顔がカッと赤くなった。
「…もうよい。二人とも下がれ。…ニナの事はもう決定したことだ。」
ワスカルが、そしてアタワルパが出て行くとワイナ・カパックは溜め息をついた。
「…兄上。」
気がつくとそこにクシ・トゥパクが立っていた。
「クシよ、聞いていたのか？」
ワイナ・カパックは苦笑する。
「…危うく回りに筒抜けになるところですよ、兄上。ここが王宮の奥の間でよかった。」
「……。」
クシの言葉にワイナ・カパックはもう一度溜め息をついた。
「…全く、ご苦労が絶えませぬな、…あの二人については。」
「…しかたあるまい。あの二人の生まれた時からの宿命なのだから。」
ワイナ・カパックは言った。
「年も近い…だが…能力も性格も正反対…しかも同じ父を持って生まれた。比べられるのはいたしかたないとは言え…もう少し仲良くとは言わぬからうまくやれないものか…。」
「兄上。先程のお言葉ではありませぬが…コリ・ティカ同様、心も体も休まる時がございませぬな。」
「…うむ。」

ワイナ・カパックはうなづいた。
「…コリ・ティカの具合はどうなのです？」
クシが聞く。
「…ワスカルではないが…やはりクスコの方が体には合うらしい。子のところ調子も良いようだ。」
ワイナ・カパックの表情が少し明るくなる。
「…コリ・ティカもあのような幼子を残しては逝けまいよ。」
「そうですな。」
クシはうなづいた。ワイナ・カパックは続ける。
「…タラナも…ニナのことを置いて行くのはさぞ心残りであったろうな。」
「…そのタラナですが。」
クシが言った。
「…姿を消したそうです。」
「何？…。」
「先程、オクロから連絡がありまして。」
クシが言う。
「…戻ってから一度挨拶には来たそうですが。」
「…まさかな。」
ワイナ・カパックがつぶやいた。
「…兄上もそう思われますか。…実は湖の畔で一人立っている姿を見た者がいるそうですので…もしかしたら。」
「…覚悟を決めていた、というわけか。」
「ええ。…このクスコに入らないと決めた時から…恐らくは。」
「…何と。」
ワイナ・カパックは額に手を当てた。
「タラナの潔い事よ。」「…まことに。」
「タラナはニナを生んだ時から覚悟をしていたのだな…いや、違う。…あれを愛した時から、あれが何者か知った時から…。」

―
「お願いでございます…私は…私はどうなろうとかまいませぬ…ただ…この子だけは…この腹の子供だけは…」
額を地面につけて肩を震わせて叫ぶように訴えるのは―タラナの姿。
―
「どうか……。」
幻を追うようにワイナ・カパックは首を振る。「ロントには伝えたのか？」
「いえ…まだ。」
「伝えてやるがよい。…たった一人の妹だろう？」
「…御意。チャルクチマに伝えましょう。」
「そうしてくれ。」

「ほら、ニナ、見ろ。」
チャルクチマが指差す。
「クスコの街がよく見えるだろう？」
「うん！」
二人が立っているのはサクサイワマン―クスコの街はプーマの形をしていると言うがそこは頭の部分にあたる―だった。小高い丘になっているためクスコが一望できる。
「…あの光っているのがインティ・カンチャ―太陽の神殿だ。」
「遠くから見てもきれいだね、父様。」
「そうだろう。」
チャルクチマは笑った。

「タワンティンスーユ中どこを探してもこんな美しい街はないぞ。」
「うん。」
ニナはうなづいて遠くを見た。
「今日は少しこの父と付き合ってくれるかな、ニナ。」
チャルクチマが言った。
「うん…いいよ。」
ニナは答えた。
「どこへ行くの？」
「いや…お前に会わせたい御方がいてな。」
チャルクチマはにっこり笑った。

第十一章　創造神の娘

チャルクチマがニナを連れて行ったのはクスコでも大きくて立派な館だった。二人は奥に通され、大きな部屋に案内された。
「…ここでお待ち下さい。」
召使が頭を下げて言った。チャルクチマはうなづいて腰を下ろす。
「…立派なお家。」
ニナがキョロキョロする。
「…だろう？」
チャルクチマは笑った。
「…主も立派な御方だぞ。」
チャルクチマがそこまで言うと先程の召使が戻って来た。
「…申し訳ございません。中庭においで下さいとのことです。」
「わかった。」
チャルクチマは立ち上がった。
「おいで、ニナ。」
長い廊下を召使の後を歩いて行く。壁は黄金で装飾されていてこの館の主の身分の高さが幼いニナにも想像できた。
「こちらでございます。」
いきなり目の前が開けて中庭に出た。
「…わぁ。」
色とりどりの花・花・花。ニナはその鮮やかさに目を奪われた。
「きれい…。」
「だろう？…アタワルパ様がコリ・ティカ様のために造られた庭園だ。」
「…アタワルパ…？」
ニナが聞き返した時だった。突然、、目の前に転がるように子供が走り出して来た。
「……！？」

ニナが驚いて目を丸くする。
「―これは姫君。」
チャルクチマが言う。
「…お一人でございますか？母君は？どちらに？」
「あっち。」
姫と呼ばれた子供が指差す。年齢は2～3歳だろうか。チャルクチマが子供を抱き上げる。「母君のところまでご一緒しますか？」
「…また高いのやって！」
子供が言うとチャルクチマは笑う。
「…承知致しました。姫は肩車がお好きですな…。」
ひょい、とチャルクチマは子供を肩に乗せるとニナを見た。
「…どうした、ニナ。」ニナは呆然と二人の様子を見ていたのだ。チャルクチマに話しかけられてようやくニナは我に帰った。そして唾を飲み込んでから口を開いた。
「その子―。」
「ああ．この姫君はトゥラ姫。…アタワルパ様の姫君だ。」
「そうじゃなくて―。」
ニナは言いかけて口をつぐんだ。そんなニナを見て面白いのかトゥラが声を上げて笑う。
「何だ、変な奴だな…面白いですか、姫。」
チャルクチマは言った。ニナは首を振り、口を開いた。
「…だって、その子は…白い神―ビラコチャの…。」
それを聞いてチャルクチマは微笑んだ。
「その通りだ。」
ニナはまた何か言おうとしたが口を開けただけで言葉にならない。確かに子供は透き通るような白い肌をしており、ニナたちは黒髪なのに日に透ける明るい色の髪をしていた。でも―何よりも目を引くのはその大きな瞳―青とも緑ともつかぬ、まるで湖のような色―。
「―この御子は“創造主”の娘だよ。」
チャルクチマはそう言ってトゥラを見た。トゥラもチャルクチマを

見てにっこり笑う。
「ようやく連れて来たな、チャルクチマ。」
男の声にニナがハッとする。気付けば花園の中に一人の男が立っている。堂々としたたくましい体、自信に満ちた表情。よく焼けた肌に白い歯が鮮やかだ。その瞳は人を引きつける光を放っている。
「アタワルパ様。」
チャルクチマが膝まづくとその肩からトゥラがピョンと下りてアタワルパにまとわりつく。
「そなたはチャルクチマが好きだな、トゥラ。」
アタワルパは笑ってトゥラを抱き上げた。そして真っ直ぐにニナを見る。
「…そなたがチャルクチマの息子か。」「あ…はい。」
ニナはうなづいた。
「どれ。」
アタワルパは腰をかがめてニナをのぞきこんだ。
「…いくつになる？」
「…6才です。」
「そうか。」
アタワルパは笑う。
「…良い瞳をしているな。」
そして右手をニナの頭においた。
「そなたも良い戦士になってこの私のために働いてくれるのか？」
ニナはエッとアタワルパを見た。
「…どうだ、私では不満か？」
ニナは大きく首を振る。アタワルパは楽しそうに笑った。
「…決まりだな、チャルクチマよ。」
「…はい、ありがたくお受け致します。」
チャルクチマは深々と頭を下げた。
「ニナよ。」
アタワルパは言った。

「…私は必ず王になる。その時には―そなたの力が必要だ。…力を貸してくれるな？」
「はい。」
ニナは大きくうなづいた。
「よし…と、いかん、コリ・ティカが待ち兼ねておるのだ。」
アタワルパが言った。花園の奥に進んで行くと―ゆったり座れる椅子に一人の女性が座っていた。
「…母様！」
アタワルパの腕の中でトゥラが手を振る。その女性は微笑んで手を振る。
「…私の妃のコリ・ティカだ。」
アタワルパが言う。コリ・ティカが優しくニナを見る。
「…待っていたわ、ニナ。」
―クスコで待っているわ…重なる言葉。ニナは目を見張る。
「…あの時はお花をありがとうね、ニナ。」
コリ・ティカは笑った。ニナはうなづく。
「大きくなったわね。…顔を見せて。」
「……。」
ニナが側まで行く。コリ・ティカはあの時と変わらないように見えた―が。美しい顔はやつれて病の影が見えていた。「……。」
コリ・ティカはニナね紙を撫ぜる。アタワルパがトゥラを下に下ろしながら言う。
「…良い瞳だろう、コリ・ティカ。」
「…ええ。」
コリ・ティカはうなづいて走って来たトゥラを抱き留めた。
「ニナは小さい頃から…強い瞳をしていたわ。」
トゥラを抱き上げてコリ・ティカが言った。髪の色、肌の色は違ってはいるが二人は紛れもなく親子で―二人とも絵に描いたように美しかった。そう回りに咲く花々に負けないくらい―。ニナはそんな二人をただ呆然と見つめていた。「これ、ニナ。」

チャルクチマがニナをつついた。
「いくらコリ・ティカ様がお美しいとは言え…無礼だぞ。」
「…あら、チャルクチマ将軍。お久し振り。」
コリ・ティカが笑った。
「いつ、ニナを連れて来てくれるのかと思っていたわ。…会わせてくれないままキトーにお戻りになるつもりかしらって。」
「…これは申し訳ない。」
チャルクチマは笑う。
「トゥラも会いたがっていたのよ。…ね。」トゥラが腕の中でキャッキャッと笑った。
「…コリ・ティカ。チャルクチマとて暇を持て余しているわけではないのだ。そのくらいにしてやれ。」
アタワルパがたしなめる。コリ・ティカは笑った。
「…わかっています、あなた。今日はニナに会えたんですもの。いい日だわ。ありがとう、チャルクチマ。」「…いえ。」
チャルクチマが微笑んだ。
「そろそろ中へ入るか？太陽も傾いて来たし。」
アタワルパがコリ・ティカに声をかける。
「もう少しここないたいけど…そうするわ。」
コリ・ティカは疲れたように溜め息をつく。
「今日はゆっくりしていって下さるのでしょう？将軍。夕食の準備をさせているから。」
「はい。」
チャルクチマはうなづいた。
「さ、トゥラ。中へ入るわよ。」
コリ・ティカが言うとトゥラは首をふり母の手をすり抜けて飛び下りた。そしてニナに近付くとその手を取ってニッコリ笑う。「行こう。」
ニナは目を丸くしてトゥラを見る。
「行こうよ、お兄ちゃん。」

「あら。」
コリ・ティカは笑った。
「ニナのことが気に入ったのね。…ニナ、相手をしてもらってもいい？」
「……。」
ニナは小さくうなづいた。トゥラは嬉しそうに手を引っ張って花園の中に入って行った。
「相変わらず我儘な奴だ。」
アタワルパが苦笑する。
「少し甘やかし過ぎたかな。」
「貴方はあの子に弱いから。」
コリ・ティカは笑った。「あの子が大人になって…嫁ぐ時が来たら…手放さそうで心配だわ。」
「そんなことはない。」
アタワルパはコリ・ティカを見た。
「トゥラは正妃になるのだから。」
「―貴方。」
コリ・ティカが困ったような表情をする。
「だから、そなたも早く元気になり―未来の王、私の後継者を産んでもらわねばな。」
そこまで言ってアタワルパは高らかに笑った。コリ・ティカは複雑な表情でそんなアタワルパを見ているだけだった。

「こっち。」
トゥラは花園の奥に連れて行くとそこに座って花を摘み始めた。どうやらそこは彼女のお気に入りの場所らしかった。ニナは言われるままに側に座りトゥラが花を摘むのを見ていた。―それにしてもこのトゥラと言い、コリ・ティカと言い―不思議な母娘であった。ニナが今まで知っている女の人たちとは違う―。そう、まるでこの園

に咲く花々みたいだ―。
「はい。」
トゥラがニナに花を差し出した。
「ありがとう。」
ニナが受け取るとトゥラはニッコリ笑った。本当に可愛い―おそらくは誰もがそう思うはずだ―笑顔だった。―本当に創造神‐ビラコチャの娘なのかもしれない…
その昔、天地を創造した神、ビラコチャは伝説によれば白い肌をして髭を生やしていたと言う。この子はその娘―。ニナはトゥラの頭をなぜた。トゥラが嬉しそうに笑う。
「守ってあげる。」
自然と言葉が出た。
「僕が…守ってあげる。僕は戦士だから。」
意味がわかったのかわからないのかトゥラはまた花を差し出した。
「ありがとう。」
ニナは答えた。
「…大切にするよ。」

第十二章　魂の行方

そして、その日遅くにチャルクチマとニナは家に帰った。トゥラが随分とニナを気に入ってしまい、帰り際に泣かれたのでまた訪れる約束をして帰って来たのだ。
「ただいま…。」
家に入ると火の側で背を丸めるようにしてロントが座っていた。その姿は―ニナには泣いているように見えた。
「母様？」
驚いたニナが飛付くとロントは振り向いた。少し目が赤いように見えたのは―ニナの錯覚だったのかもしれない。
「あら、ニナ。お帰りなさい。」
ロントは笑う。
「…アタワルパ様にきちんとご挨拶できた？」
「うん、母様、どうしたの？」
「どうしたのって？」
「…泣いていたんじゃないの？」
言われてロントはびっくりした顔をしたが首を振った。
「いいえ、泣いたりなんかしないわ。…だって悲しいことなんてないもの。」
「母様、本当に？」
「ええ、でも少し寂しかったかしらね。」
「なぜ？」
「あなたがお家にいなかったから。」
ニナの顔が明るくなり、笑顔になった。
「母様…！」
「さあさ、…ニナはもう遅いから眠らなくては駄目よ。誰かニナを部屋へ連れて行って。」
ロントが言うと奥から召使が出て来てニナを連れて行った。

「おやすみなさい、母様、父様。」
「おやすみ、ニナ。」
部屋を出て行くニナを見てロントは溜め息をついた。そんなロントの肩をチャルクチマが抱く。
「…あなた。」
「泣いていたのだろう。」
「……。」
ロントは下を向いた。
「私には隠すことはあるまい。…タラナの事でも考えていたのか？」
「ええ。」
ロントは小さくうなづいた。
「…タラナは…あの娘は…幸福だったのかしらって。…一番愛したお方を失い―その子を生んでも自分の手で育てる事もかなわず―そして…。」
「ロント。」
チャルクチマが言う。
「…人の幸福とは回りの人間が判断するものではない。…タラナ自身がどう考えていたのかということ。」
「……。」
「あのニナを見ていればわかる。…タラナは幸福だったはずだ。だからこそ愛情を注いでニナを育てた。―違うか？」
「…あなた。」
ロントの目から涙がこぼれた。
「タラナは幸福だったのだ、ロント。そう信じよう。」
「―はい。」
ロントはうなづいて涙を拭いた。チャルクチマが笑った。
「…今日はな、トゥラ姫にすっかりニナが気に入られてな。」
「まあ。」
ロントは笑った。
「ずっと一緒に遊んでおられた―。」

「それは良かったこと。」
「アタワルパ様もニナが気に入られたご様子。いずれはご自分の為に働いてくれとおっしゃられてな。」
「まあ…そんなことまで。」
ロントはうなづいた。
「…コリ・ティカ様のお体はいかがでした？」
「…うむ。まあ、キトーから戻られた時よりはかなり良くはなっておられるが…やはりご本復には程遠いな。」「…それはさぞかし、アタワルパ様も御心配ですわね。」
「…ああ。…コリ・ティカ様も姫がまだお小さいゆえ―何としてもお元気になりたいだろうよ。」
「…そうですわね。…私も明日にでもコリ・ティカ様にお見舞いの品をお届けしましょう。」
「それがいい。」
チャルクチマはうなづいた。
「…我々は…いずれまたキトーに戻る。…クスコと…ニナは頼んだぞ。ロント。」
「はい。」

―その頃。タワンティンスーユと呼ばれたこの国は二分されつつあった。現皇帝、ワイナ・カパックには大勢の皇子や皇女がいたのだが―次代のこの国の“王―インカ―”となり得る“統治者”の能力を持った者はいなかった。そのため、後継者争いが起こるのは―当然の事と言えた。最有力なのは二人の皇子―今や正妃の産んだただ一人の男子となった、ワスカル。そしてもう一人は側室でクスコより遥か北のキトーの王女を母に持つアタワルパ―。同じ年頃の二人は何かと幼い頃から比較され対立していた。
そのため、ワイナ・カパックは二人を離した。アタワルパにキトーを治めるよう命じワスカルはクスコにおいた。しかし、二人の対立は日に日に激しくなっていくばかりだった。そうして時代は確実に

火種をはらんでいく―。　ほどなくしてアタワルパは己の部下たちを連れてキトーに戻って行った。
ニナもロントと二人の暮らしになり少々さびしい思いもしたが楽しく暮らしていた。そして、コリ・ティカの願いもあって時々はコリ・ティカのところを訪ねてトゥラと遊んだりもした。コリ・ティカの病状はあまりはかばかしくなく、一進一退ていうところでワイナ・カパックが直属の医師を派遣したりしていたが回復の兆しは見えなかった。季節は休みなく巡り―やがて収穫の季節は終わり、冬に向かおうとしていた。

「太陽の祭り？」
ニナが聞き返した。
「そうよ。」
コリ・ティカがうなづいた。
「あなたは見たことなかったわね、ニナ。」
寝台の上で横になったままコリ・ティカが言った。ニナはうなづいた。
「…年に一度の…太陽神（インティ）を祭る…大きなお祭りよ。…国中から人々が集まって来るわ。このクスコに。」
「……。」
「色とりどりの服を着て…踊ったり歌ったり―皆でね、太陽神（インティ）を讃えてね。また春が来るように、また暖かい季節が来るようにって…。」
「皆が集まるなら…キトーからアタワルパ様や父様も帰って来るんですか？」
ニナが聞く。
「…そうね。その前にお父様が巡幸から戻られるわよ。…兄様やチャルクチマやみんな帰って来て…クスコに…。」
そこまで言うとコリ・ティカは咳き込んだ。
「…皇女様！」

ニナが心配そうに言う。
「…ああ…大丈夫よ…ニナ。」
コリ・ティカは肩で息をして言う。
「優しい子ね、あなた。」
すっかり痩せてしまった細い手でニナの頭をコリ・ティカは力無く撫ぜた。
「…太陽の祭り。…インティ・ライミ。兄様と…参列したわ。」

コリ・ティカはニナを見ていたが―全く違う人物を見ていることにニナは気付いていた。
「…もう一度、インティ・ライミが見たい。」
「…じゃあ早く元気にならないと。」
ニナは必死に言った。
「いっぱい食べて…お薬を飲んで…。」
コリ・ティカは笑う。
「そうね。…ニナ、ありがとう。…あなたは本当に…。」
最後は言葉にもならずコリ・ティカは息を吐いた。
「…ニナ。これだけは忘れないで。」
「……。」
「…大切なものは…決して失われないのよ。…決して。」
「……。」
「…わかるわね、ニナ。あなたの心の中にある大切なものは…誰にも奪えないし、失われない。…忘れないでね。」
ニナは大きくうなづいて―コリ・ティカの瞳をじっと見つめていた。

そして、あと二週間で太陽の祭りだというある日のこと―。
「ニナ、起きて、ニナ。」
朝早くにロントの声で目を覚ました。
「母様、なあに？」
「…母様は出かけて来るわ。―コリ・ティカ様が亡くなったの。」

「……！」
ニナは驚いて飛び起きた。
「いつ…？」
「夕べ遅くに。…で、トゥラ姫がね。」
「トゥラがどうしたの？」
「……お母様の側を離れないらしくて。」
「…僕も行く。」
ニナは立ち上がった。
「僕がいれば…大丈夫だよ。きっと。僕も行く。」
「わかったわ。」
「お父様たちは？」
「明日か明後日、お着きだそうよ。…その前に来られるかもしれないけれど。」
「……。」ニナは着替えながらコリ・ティカの言葉を思い出していた。
―
「もう一度、インティ・ライミが見たい…。」
「トゥラ！」
ニナが声を掛けるとトゥラは振り向いた。昨晩からずっと泣いていたという彼女はニナを見るとようやくコリ・ティカの亡骸から離れてニナに駆け寄り抱き付いた。
「…大丈夫だよ…僕が来たから。」
トゥラはまた泣きじゃくり出した。ニナはコリ・ティカを見た。コリ・ティカはまるで眠っているかのように―そこに横たわっていた。その顔はやつれてはいたが十分美しく―死してなおその名のとおり―コリ・ティカ（黄金の花）だった。
「お庭に行こうか、トゥラ。」ニナはトゥラの髪を撫ぜて言う。
「僕が一緒にいるから。」
二人は庭に出た。そこはニナが初めてコリ・ティカとトゥラに会ったあの庭だった。しかし今はあの時と違い花も無くただ枯れた草や

木が風に揺れていた。日だまりを見つけてニナはトゥラと座った。
空を見るとどこまでも青い―。
「…母様。」
トゥラは小さくつぶやいてまた少し泣き出した。
「…トゥラ、大丈夫。僕が側にいてあげるから。」
ニナがトゥラをギュッと抱き締めた。
「約束するから。」
「…母様、どこに行ったの？」
トゥラがニナに聞く。
「トゥラをおいてどこに行ったの？」
「……。」
ニナはふと顔を上げた。
「―空（アナン）。」
「…アナン。」
「…そう高い所。そこで…ずっと僕らを見てる。アナンカチャ（天国）で。」「アナンカチャ…。」
トゥラが空を見上げた。翠色の瞳に青い空が映る。
「そう。いつでも僕らを見ている…。」
ニナは言った。
―
「忘れないでね…ニナ。」
コリ・ティカの声が蘇る。
―
「―大切なものは決して失われない…。」

「ニナ。」
ロントの声だ。
「ニナ、どこにいるの？」
「母様、ここ。」
ニナが小さい声で言う。「…ニナ。」

「しっ！」
ニナが言った。ニナに寄り掛かってトゥラが眠っている。
「ま…。」
ロントが言った。
「さっき眠ったところ。泣き疲れたんだね。」
「…お可哀想に、こんなお小さいのに。」
ロントは少し涙ぐんでトゥラを抱き上げた。
「…あなたは家に帰りなさい―夜にはアタワルパ様も戻られるそうよ。」
「…父様も？」
「ええ。」
「…わかった。」
ニナはうなづいた。

―人間はいつか必ず、死んでしまう…みんな。
青い青い…吸い込まれそうに青く高い空。
―死んだ人の魂はどこへ行くのだろう…
流れて行く白い雲。
―その人の想いは…
風が吹き抜けて行く。―どこへ行ってしまうのだろう…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5258a/

Ｉｎｔｉ's Ｓｔｏｒｙ－Ｎｉｎａ

2010年11月13日03時47分発行